

---

# 人喰い

メタかつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人喰い

### 【NZコード】

N3757D

### 【作者名】

メタかつ

### 【あらすじ】

サンタクロースが好きな方、残虐シーンが嫌いな方、性的描写が苦手な方…絶対読まないでください！気分を害する恐れがあります。なおこの作品は完全なるフィクションです。気分が悪くなつても作者は責任持てませんので…

## プロローグ

世の中には未解決猟奇殺人事件が多数ある。まあ有名な所では19世紀ロンドンで起きた『ジャック・ザ・リッパー』だろう。切り裂きジャックといった方がわかりやすいか？猟奇殺人は犯行の壮絶さから人の記憶に残りやすい…

だが20世紀、フィンランドで起きた猟奇殺人事件を覚えている人はいないのではないか？あれだけの事件だぜ？どう考えてもおかしい…

実は事件の背景には政府の陰謀があるようなんだ…  
疑問を持った俺は独自の調査で犯人までたどり着いた。そして俺は今犯人の目の前にいる。犯人は俺に自慢するかのように当時の犯行を話してくれたよ…

ちなみに犯人の名前は…

『キリア・サンタ・クロース』

話は1970年までさかのぼる…

## 第1章 ～人喰い～

異様な光景である…

男の部屋はコンクリート剥き出しで窓もベッドもテーブルも何一つなく、ホコリ一つ舞つてはいない。殺風景で圧迫感がある部屋の中になぜか獣臭が漂つ。

男は淡々と服を脱ぎ進め、すでに陰茎ははちきれんばかりに硬直している。男は服を脱ぎ終えると顔を上げた。そこには全裸にされた少年が涙を流し恐怖で震えている、両手はロープで結ばれ上に伸びている。いわゆる中吊り状態といづやつだ……

「サンタのおじさん、嘘でしょ？お願いやめて」

少年はこれから起こる行為が予想されるのか哀願の表情で男を見る  
…男の名前はキリア・サンタ・クロース。正真正銘子供達に夢を運ぶサンタクロースだ…

サンタは満面の笑みで口を開いた。

「坊や私はね前から君の事が好きだつたんだ……人は好きな相手とセックスしたいと思う…でもね私は好きな相手の内蔵が見たいんだ見せてくれるね？」

サンタはナイフを片手に少年に近づく、少年は恐怖で動けない。ナイフを陰茎に触れた。

「うう痛！」

軽く皮をめくつた程度である。すぐにナイフを戻す。

「痛いよ…やめてよ！家に帰らしてよー！」

少年が涙を流し哀願する。サンタは急に優しい顔になった。

「痛かったかい？坊やごめんね…すぐに気持ち良くなせて上げる」

するとサンタは自分の陰茎を少年の陰茎にこすりつけ腰を振った、少年は涙を流し悲鳴を上げるがサンタは気にならない。5分程たち。絶頂を迎えた……

少年の腹には精液がじびつ付いている。

「う…う…」

「ハアハア…」

「ハアハアハア」

「ハア！」

少年の顔が激しく曲がった、サンタは拳を振り上げる。何度も何度も拳を振るう。

「気持ちいいかい？感じルかい？君のカラだハセイ」「ウダよ！ワタシをモットキもチヨクシトオクレ？ワタシヲモジトコイフンサセテオクレ！————！」

「ヒギヤアアアアアアアアアアアア————！」

少年の悲鳴が聞こえなくなつた時、サンタは拳を下ろした……

サンタは鮮血にまみれ、肉片で顔を汚した。少年の顔はすでに原型を留めてはいない。歯は欠け、眼窩は下に垂れ下がっている、皮は

抜け中の肉が顔を見せる。サンタは少年が動かない事を確認すると不満そうにナイフを手にした……

「イキタママ、ナイゾウミタカツタノー……」

少年の腹にナイフを突き刺す、下に削していく。腸が飛び出してくる、サンタの下には内蔵がぶちまけられた……

そしてサンタは手淫を始め内蔵に精液を撒き散らした……

少年の遺体は特性の窯で煮込み10日かけて食べた……

普通、快楽殺人は徐々にエスカレートしていくものではあるが、サンタにとつてこれが初の殺人であった。

彼は小さい時から俊才として知られていた。学問、芸術、運動すべて非凡な才能を持ち合わせていた。

殺人衝動は物心ついたときからあつたが、だれも気づかなかつた。いや氣づかないように演技をしていた。

彼はどうしたら人を殺してもバレないか考えた時に、彼は人から信頼され殺人なんて無縁な人間と思われていればバレない……と考えた。

国立大学を主席で卒業し、医学博士までとつた。そしてサンタクロースを襲名したのだ。

すべては快楽殺人を繰り返すために……

続く……

## 第2章 ～擬態～

少年が惨殺され事件が発覚したのは少年が死んでから20日後のことだった。

その日少年宅には一つの郵便物が届く。父親が中を開けると手紙と何やら小箱が入っていた。

手紙の全容をここに記する…

- - - - - 親愛なる諸君へ

私はあなたにとても感謝しております。なぜなら私に息子様をプレゼントしてくれたのだから…

息子様も大変喜ばれた様子で、私との行為を楽しんでおられました… 行為後、息子様を解体したのですが宜しかったでしょうか？

今でも思い出します、息子様のお尻のおいしいこと、おいしいこと…

私は幸せ者でござります

愛を込めて

『サンタ』より…

-----

父親が怪訝な顔で手紙を見た。小箱を開けたときだ…父親の表情が変わる…

「ギャアアアアア…！」

父親がその場で座り込み小箱を落とす… 箱に入っていた物は…

男性の陰部だった。

「サンタのおじちゃん、お散歩ですか」

サンタの皿の前には真っ赤なワンピースを着た可愛い少女が犬を連れている、軽く談笑して少女は歩き出す。

「あれまサンタさん！今年もプレゼントがんばってくださいねえ」

今度は呟のこに中年男性のおばさんだ。軽く談笑しておばさんは歩き出す

「サンタさんプレゼントありがとうございます」

「お仕事頑張つてください」

「あれま～サンタさん、これ家で取れたジャガイモ……」

サンタを見ると、尊敬の念を込めて一礼する。サンタも満面の笑顔で答える。いつもの光景である。だれもサンタの裏の顔を知らない。「考える」とも無いだろ？ 全てがサンタの計算通りである。すると前から警官が走ってきた…別に驚く」とでもない計算通りの展開である…

「サンタさん、ちょっとお時間いいですか？」

「あー…ディベッダさん、何でしちゃうか？」

警官トライビッシュは元気いっぱい話した。

「あの…ケビン君失踪事件は知っていますよね…それでですね…朝こんな手紙が届いたのですよ」

サンタが手紙を受け取る…手紙を見てサンタは震え、目には涙を浮かべている…

「あの…手紙の最後に『サンタより』と書いてありますが、この手紙見えないですよね？」

サンタは涙をこらえ震えている…すると後ろから大柄な男が近づいてきた顔は怒りに満ちている。

「おい警官！言つていーこと悪いことがあんじゃねーのか？サンタさんが犯人だと思つてんのか

「ち、違いますよ！私も仕事なんですよ！だいたい犯人が自分の名前書くわけ無いわけでして…」

デイビッドは一礼するとその場を逃げるよつに帰つた。大柄な男は舌打ちしサンタの肩を叩いた。

「サンタさん今年もプレゼントよろしくな！」

「はい！期待しててくださいね！」

サンタは満面の笑みで答えた…全ては計算通りである…サンタは知つていた、統計的に犯人が手紙に自らの名前を書くことがないと。勿論直筆ではなくパソコンで打ち込んだ…そしてこの村では自分が疑われる事はない…

『ダレモ、ワタシノカイラクヲジャマスルヤツハイナイ…』

サンタは夜、地下室のパソコンを覗き込む。そこには村の少年少女

のデータがインプットされてる。…

サンタの散歩はデータ収集でもあるのだ。彼は少年少女の帰宅時間、性格、行動全てをインプットしていた。そしてパソコンはある少女の顔で止まる…

「エレナ・ワグナー、十三才……」この子にしまじょつかあ……」

サンタの股間は既に破ち切れんばかりに盛り上がっている。おもむろニズボンを下ろし手淫を始めた。

「いいよ。いいよ。イク！」

サンタは独り言をブツブツ言い、手淫に励む。  
サンタの太ももには自らの精液がこべりついたのだった……

続  
く  
：

### 第3章 ～2人目の犠牲者～（前書き）

キリア・サンタ・クロースのモデルはアルバート・フィッシュュです。

### 第3章 ～2人目の犠牲者～

この日、キリア・サンタ・クロースは朝から地下室に籠もりパソコンを眺めている。犯行の手順を頭の中に叩き込む。

人間と言うのはいつもと変わった行動を嫌う。できる限り自分で作ったルールを守ろうとする、一週間もその人を見てれば生活パターンは分かつてしまつ。

サンタはエレナの行動は手に取るようになる。恐らく今は学校で勉強しているだろう。真面目な彼女は私語も言わず、教科書を見ているはずだ…

16時40分頃、エレナは彼氏のマイクと共に学校を出るだらう。エレナは処女なのか？今日確かめてみようと思つ。

17時頃、マイクの家に着くはずだ手を振りながら『バイバイ！』と言つはずだ。エレナはそこから自宅まで一人だ…まだ襲うのは早い…

10分程歩いたら私の家が見える…この時間帯、私の家の周りにはエレナ一人になるはずだ…門でエレナは一度立ち止まるだらう…そしてこう言つはずだ…『サンタさんの家はおっきいなあ』  
そこだ！そこでクロノクロムを吸わし、直ぐに地下室に運ぼう…

サンタは立ち上がり時計を見た…

「16時27分…そろそろ学校からである頃ですねえ…」

サンタはこれから起じるであろう行為を想像し手淫をした…

その頃…

「みんなまた明日ね～ もう、マイク帰る」

エレナとマイクは手を繋ぎ談笑しながら帰る。実に微笑ましい光景である。エレナは途中でマイクと別れる。サンタの予想通りである。既に辺りは薄暗くエレナ一人しかいない。サンタの家の前を通る。エレナは立ち止まりこういった

「サンタさんのお家、おつきいなあ」

ガツ！

エレナの意識がなくなる

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………？」

エレナは状況が把握できない…だが妙に寒い…  
全裸である。さらに腕にはロープが結ばれ宙吊りにされている。エレナは恐怖と言つより訳が分からず混乱している。

「目が覚めましたか…」

「ナキ！」

エレナが顔をそむけた。そこには全裸の中年男性がいる。既に陰茎は破ち切んばかりに垂直に伸びている。

「おやおやマイケ君に見せてもらつてないのかな?」

男はエレナに近づき陰茎を太ももに押し当てる。エレナは恐る

「サンタさん？えつ？ビーフिंフ事？お願いやめて……！キヤアア！」

サンタはエレナの股を開け秘部をマジマジと見ている… サンタは嬉しそうに言った。

「処女だつたんですねえ……嬉しい……今日はこひぱこ販売ありますよ」

サンタは躊躇なく膣に陰茎を突っ込み腰を振った。処女膜は破れ陰茎は血に染まる、エレナは人の物とは思えない悲鳴をあげる。そして精液を放出した。エレナは涙を流し体が震える。

「ハ...ハ...ハ...醜い...やだ...ひどい...変態。」

「变态？……变态……」

サンタの表情が曇る。体は震え、歯軋りが力タカタと聞こえてきた。

「……へんたい……私が？」

拳を握る力が強くなる、Hレナの顔が恐怖でひきつっていく…サンタから獣臭さへ漂つてくる…

すると急にサンタから震えが止まり、満面の笑顔でエレナを見た。

「Hレナ君…私はね…7才の時、両親のセックス現場を見てしまったのだよ…私はね射精してしまった。私は頭の中で母親を犯したいと思った。

そして母親を食したいと思つたのだよ…」

「……」

「母親を愛していたからね…母親を食べる事で身も心も一つになれる…私の言いたいことがわかるかい？」

エレナは首を横に振る。

「Hレナ君、私は君を愛している！君を食したい！…！」

サンタはHレナの脣に歯をたてた、Hレナは悲鳴をあげる。

「ギヤアアアアアアアア！」

脣は裂け子宮は切り裂かれ腹部は真っ赤に染まる

歯が腹部に達しようとしたときだ… Hレナがさらり悲鳴を強める…

「ギョーシャアアオイリヤアアアアア…-----アウ！」

一気に内蔵が体から飛び出した…

「カツ……」

エレナの悲鳴が消える。サンタは満面の笑みで床に落ちた内蔵の中に飛び込んだ…

キリア・サンタ・クロースは恍惚の表情で内蔵をすくっていたのであつた…

サンタ2人目の犠牲者であつた…

続く…

## 第4章 ～快感～

エレナの死骸はノコギリで解体し内臓は塩付け、残りはソテーし食べた。そして、サンタは前回の犯行と同様に両親待てに手紙と死骸の一部を送りつけた。手紙は前回の手紙と内容は酷似しているためここに記する必要はないと思つ。

話はそれるが、幼児獵奇殺人犯というのは幼児期に何らかのトラウマがある場合多い。最も多いのが性的虐待と言われているがキリア・サンタ・クロースの場合は少し違つてくる。

彼は母親を犯したのだ。暑い夏の日、彼は仲間数人とともに母親を森の中で犯した。抵抗する母をよそに彼は自らの陰茎を実の母に押し込んだ。

涙を流す母の顔に容赦なく鉄拳を送る…仲間達は母親を押さえ抵抗さえもさせなかつた。

そして精液は膣内に放出された…

彼らは事が終えると、一旦散に逃げつていった。サンタは仮面を被つていたせいか母親にはバレてはいない…

母親はこの事を誰かに話すことはなかつた…女としての意識と言うよりサンタクロースの妻が強姦されただの世間にしれなかつたのだ。

サンタクロースは子供達の憧れであり夢なのだ…母親は子供達の夢であるサンタクロースを汚したくなかったのだった…

キリア・サンタ・クロース11才の時の出来事であった。

中年の色白男の前には白髪交じりのスーツを纏つた紳士的な老人がコーヒーをすすっている。カップはマイセンだらうか？天使が描かれている。

老人はカップを置き、前の男に視線を向ける。ゆっくりと口を開いた。

「日本のジャーナリスト君、私の童貞は母に捧げたんです…母も感じてくれて良かつた。私は母との行為を思い出し何度もオナニーしました…」

そう、この老人こそが現在のサンタ、キリア・サンタ・クロース本人である…もう齢80は過ぎているだろう。スーツはブランドで統一し、室内なのになぜかシルクハットを被っている…男は信じられなかつたこの紳士的なサンタが幼児連續獵奇殺人犯とは…男はサンタに目をやつた、サンタは薄ら笑いを浮かべて話を続ける

「日本のジャーナリスト君、私が何故遺体を食すかわかるかね？」

男は顔をしかめ

「さあ」と言った。するとサンタは満面の笑みを浮かべる。

「先に話したように食することで身も心もひとつにすると言つのもある…それともう一つ、遺体という最大の物証を食す事で物証その物を消し去るというのもある…」

話し終えると、サンタは高笑いを上げた。その光景が不気味で男は目をそらした…2人は目を合わせることもなく重い空気だけが流れ

る。そしてサンタは急にまじめな顔になつて呟いた。

「日本のジャーナリスト君、君は眞実を知りたいと言つたね。」

「…………はい」

サンタはコーヒーを一口飲み、一呼吸おいた。サンタは男の顔を睨み怪訝な顔で言った。

「ついてきたもん…」

「一言いふと、男とサンタは立ち上がり階段を下りた。サンタは無言で屋敷の奥へ奥へと進み、屋敷の地下へ降り立つ……そこには黒い鉄の扉がある。扉はの奥からは獣臭が漂つてそうだ。サンタは扉を掴み開ける……」

男は息を飲んだ

コンクリートむき出しの壁、部屋の真ん中には滑車、無造作に置かれたロープ、所々、黒ずんでいるのは血痕だろつか？あまりの圧迫感で吐き気まで催す…

「ここが、幼児と私の愛の巣です」

「」

「こ」の地下室で私は殺戮を繰り返した。幼児の内蔵を掻き出した。そして私は余りの快楽に酔い自分を抑えられなくなつた。」

「」

「一年もすぎた頃には村の三割の幼児は消えていった…  
その頃の私は計画的に幼児を食べる事さえも面倒になっていた…出  
来るなら好きな時に好きなだけ食べたい…そして私は自首したんだ  
…」

「…………」

「殺しのライセンスをもうためにね…」

薄暗い地下室のためかサンタの顔はまるで悪魔のように見えたのだ  
つた…

## 第5章 ～殺しのライセンス～

1971年3月7日

キリア・サンタ・クロースが幼児を殺害して半年がたつた。この頃になるとサンタは散歩に行く回数も減り、地下室で独りで過ごすことが多くなつた。

サンタはもう自分を抑えることが出来なくなつていた。最初の頃は1ヶ月に1人を殺害する程度だったが、日に日に人喰い願望が強くなり2週間に1人、1週間に1人と間隔が縮み今では毎日殺しをしても満足できない体になつている。

いつしかサンタはどうしたら沢山の人を食べれるか考えるようになつた。出来れば合法的に何も考えず食したい。そしてサンタは思いついてしまつたのだ。合法的に人を食べる方法を……

地下室の前には警官デイビッドとサンタが立つてゐる。デイビッドはこの異常な光景を直視できずサンタの顔を見た。サンタは満足気に笑みを浮かべ股間をまさぐつてゐる。すでに目の焦点は定まっていない……

「デイビッドさん、素晴らしいでしょう。私のコレクションは……」

「…………」

デイビッドは言葉も出なかつた。異臭が鼻につく……

地下室の滑車にはひとりの少女が繫がつてゐるがすでに下半身は無

く内蔵も綺麗に取られてしまつてゐる。さらに大きな釜の中には数人の頭部が煮込まれ皮は溶け頭蓋骨が見える。壁には人の上半身で出来たベストがハンガーに掛かっている。棚の上には人の陰部が綺麗に並べられてゐる、ビンの中にはホルマリン漬けした内蔵の一部だろつか……

薄暗い地下室ではサンタが不気味に笑つてゐる。

「ティビッシュさん、私はね……もう抑えられないんですよ……今この場でも食べたくてしようがない……私はね……殺しのライセンスが欲しいんですけど……」

「……まあ？」

「殺しのライセンスです。合法的に人を食べたいんです……だからあなたを呼んだんです……」

「…………」

「言つてゐる意味が分かりませんが……」

ティビッシュは困惑した。サンタの言つてゐる事がわからない……もし殺しのライセンスがあるとしても自分と何が関係してゐるのか……

「サンタさん……言つてゐる事がわかりませんね……これだけの事をしたんだ タダで済むと思つてゐるんですか？」

サンタの股間が濡れているのがわかる。射精したのだ。このティビッシュの発言を予想してたように奇声にも似た笑い声をあげる……

「くくく……知能が低い人間は困りますねえ……説明が必要なようだ……私はサンタクロースですよ……子供達に夢を運ぶサンタクロースです。フィンランドが世界に誇るサンタクロースです。まだわかりませんか？」

ディビッドは眉間にシワを寄せて首を横に振った

「理解力が低い人間ですねえ……

ディビッドさんあなたはフィンランド政府にこの事実を伝えるのです……

サンタクロースが幼児を食べたとね……

世界が批判しますねえ」

「…………

「私はね国家公認のサンタクロースですよ……当然国家にも責任が及ぶはずだ……観光客も激減するでしょう……国はこの事実をどうすると思います?」

「…………

「隠すでしょ……私は夢を叶えるサンタクロースであり続ける……この事件は最初からなかつた事にする歴史から抹消する……それが国にとって最良な選択のはずですよねえ……」

ディビッドは体を震わせサンタを睨んだ。サンタは氣にも止めず『ティビッドの肩を叩く。

「ティビッドさん……私はサンタクロースであり続ける……君は国にこの事実を伝えるのです……国が私に『殺しのライセンス』をくれるの

です……これで私は政府公認の人喰いができるのです……」

サンタは満面の笑みでデイビッドを見た。デイビッドは困惑し言葉  
がでない……

こんな事が許されるのか？サンタの言つてることが許せなかつた……

だが国はサンタの予想通りの反応をしたのだった……

## HΠΠΟΡΕΓ

薄暗い地下室の中、スーツに身を飾った老人は錆び付いた滑車を眺めていた。老人はどこか満足気に薄ら笑いをしている。この老人は現在のサンタグロース、『キリア・サンタ・クロース』本人である。サンタは一息おき男に話しかけた。

「日本のジャーナリスト君、私の話はこれで終わりだ。私はフインランド政府から守られているのさ。他に何か聞きたい」とはあるかな？」

薄暗い地下室で悲しみの表情を浮かべる男。日本から来たジャーナリストと言つ男。サンタはこの男の顔を覚えていない。男にとつて幼児連續殺人事件などどうでもいい事だった。

ただひとつ、キリア・サンタ・クロースと言つ老人を死ぬ前に一度でいいから見ておきたかったのだ、男はサンタに視線をおくりに話しかけた。

「サンタさん……私の顔に見覚えはありませんか？」「は？……どうこうことかね？」

「…………」

男は黙つた。自分の正体をサンタに告げるべきか、重い沈黙が2人の間に流れれる。数分すぎた後男は頭を下げ一言。

「ありがとうございました……」

男は一言つげると走るように屋敷を出た。サンタは後をおおうしない。その場で立ち尽くし涙が止まらなかつた。

キリア・サンタ・クロースは男が誰なのか理解してしまったからだ。  
薄暗い地下室の中、サンタは膝をつき震えている…

男の正体：

それは…

漆黒の地下室の中キリア・サンタ・クロースはただただ震えるしか  
なかつたのだ。滑車の音だけがキイキイと虚しくなつていた…

## Hプローグ（後書き）

正直、未完の作品になってしまいました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3757d/>

---

人喰い

2010年10月14日16時44分発行